大岡昇平の〈戦争〉

――『俘虜記』を読む

石﨑　等

一、小さな戦史『西矢隊始末記』の意義

一・一　西矢隊概説

大岡昇平の〈戦場記〉〈俘虜記〉ものは、格別心を揺さぶるようなドラマが書かれているわけではないのに、どうして読んでいて飽きることがないのだろう。それはたとえ小さなことでも意識の空白を嫌い、その心理の動きを克明に埋めようと考えながら書いている一個の人間の魂に興味を感じるからではないだろうか。その執念は他の戦記ものを圧倒している。軍隊生活ならびに俘虜収容所という非日常の世界における人間のエゴイズムの確執への容赦ない剔抉、生と死をめぐる哲学的な知性の閃きなど――そこに展開されるドラマは興味が尽きないからではないだろうか。

一九四八年六月、大岡は『西矢隊始末記』を『芸術』に発表した。この記録の素稿はレイテ島の俘虜収容所で成立したと推測される。片仮名交じりの漢文体で所属部隊の公的記録というべき作品である。中隊長の西矢政雄（当時二六歳）以下下士官のほとんどが戦死したために、生き残った大岡が書き記すことがなかったならば、戦史上、ミンドロ島守備隊の存在はほとんど省みられることなどなかったであろう。軍事拠点としての重要性の有無、展開された兵力の規模、その戦闘の激しさと悲劇性との対比において、戦争終末期に近い一九四四（昭和一九）年九月三〇日、大本営から発表されたテニアン島ならびにグアム島守備隊の玉砕――実際は両島の守備隊は八月中旬に全滅していたが情報は隠蔽されていた。その後ジャングルに逃れて抵抗し投降した将兵がいたけれども、多くの戦死者を出した悲劇として戦史に特筆されている――ほどには世間の関心を呼ぼうとはしなかった。戦捷と悲劇的玉砕。国民の耳目を集めるのは勝利と戦死の報道だけではない。もし『俘虜記』以下の仕事がなければ、大岡たちの守備隊の事跡はフィリピン戦史の片隅に置かれたままであったに相違ない。

ミンドロ島を守る兵力は歩兵二個中隊であった。島の北東部を塩野隊、西南部を西矢隊がそれぞれ警備した。ルソン島のバタンガスには大隊本部が置かれていた。塩野隊が守る地区の北の町カラパンは海を隔てて直線で約五〇キロメートルであった。西矢隊

の拠点サンホセは島の中心にある山脈を越してバタンガスまで約一五〇キロメートルの距離、さらにマニラまでは約二五〇キロメートル隔たっていた。

軍の組織は、戦時状態に入ったとき、一個中隊（兵員二五〇名）が増設された。一般的には、大隊の下に三個中隊が置かれ、中隊は平時一〇〇名、戦時には一五〇名が増員された。米軍の上陸が近づいたとき、大隊本部から一五〇名の斬込隊の援軍を送るという知らせが届いたことが書かれているが、それは実現しなかった。本部の計画では斬込隊は三個中隊の一部隊か増設部隊から割愛した要員であったかもしれない。

中隊を統括するのは中隊長であった。中隊長の存在と役割について伊藤桂一は『兵隊たちの陸軍史』（一九六九・四、番町書房）の中で次のように述べている。

> 平時においては、中隊長は兵員とあまりなじみがなく、班長（戦時の右翼分隊長）をもっとも身近に感じるが、いったん戦場に赴くと、中隊長の存在が俄然重要になってくる。集団としての戦闘単位は中隊であり、中隊兵員はすべて中隊長の人格識見の感化を受ける。このため、中隊長の人間性や経験の如何によって、中隊の兵隊は、その運命を左右せられることもしばしばであった。（同書五〇頁）

要するに〈中隊ヲ統率シ軍紀ヲ振作シ風紀ヲ粛正シ部下教育訓練ノ責ニ任ジ〉（『軍隊内務令』）というように兵隊の中心であった。平時、中隊長室にいて戦略の指揮と事務の掌握をつかさどった。

西矢政雄中隊長は人間性豊かないい中隊長であった。大岡は随所にその人柄を書き残している。分隊長の下士官的な狡猾さなど微塵もない人柄は兵員たちから慕われた。大岡に一目置き、二人は馬の合う関係であった。

西矢隊には中隊付の将校がいなかった。そのこともまた中隊の特徴だった。たとえ一〇〇名に満たない守備隊といえども巨大な軍隊の一細胞であり、軍紀がやや緩んでいた奇妙な〈ポンコツ部隊〉とはいえ隊としての組織が乱れていたわけではない。ただビンタの横行や俘虜への拷問がなかったことは、中隊長の人柄と方針ばかりではなかったようだ。

多くの兵士が軍組織の中で生き抜くために、エゴイズムから犯さざるを得ない様々の言動に対して、大岡は自分のエゴイズムは彼らとは違っているのではないかと違和を感じる。それは彼らとの距離感にもとづいて自分のあり方を判断し、懐疑し、否定的な立場を貫こうとする心の動きであったのだろうか。もしそうだとしたら、大岡の言動とその記述は〈善〉という観念にもとづくものであったに違いない。大岡の〈戦争物〉には、国家＝軍隊という組織が遂行するために生じる大きなエゴイズムよりも自分のエゴイズムのほうが大切だという自負の自覚が強烈にある。その自負は戦争体験者として自分（そして戦友）が生きた状況を推測して書くことの核となっている。

一・二　〈戦争〉の実態――「兵十六」の一人として生きて

大岡にとっては、軍隊／国家という抽象的なものの存続が大量

な個人の死を代償としてこれ以上優先されることは間違いであり、もはや戦争の実態は必要限度を超えているのではないかと思われた。この思考の強度は他の仲間の兵士のエゴイズムとは明らかに違っていた。彼らのエゴイズムは自分の命の生存を守るだけのものであった。しかし大岡のエゴイズムは彼らの言動を視野に容れた一段高い地点からの思考だった。一見して隊内における大岡の節度や忠誠には古風さがあるようだが、実は作戦そのものへの理性的な懐疑からきたものであった。追いつめられ悲壮感に満ちた戦略は、陸海軍の組織を維持していく人間たちの無策の象徴と思われた。

第一次戦後派の文学は、存在のある部分を自分以外の、たとえば軍隊などを根拠に依存しなければ成り立ちえないものだった。大岡が軍隊の中における礼節とか節度とか忠誠という古めかしいモラルに必ずしも批判の矢を向けていないという点は重要である。それは警備隊の中でも比較的任務の軽い通信兵であったからではない。礼節とか節度とか忠誠というモラルは、ある意味で第一次戦後文学の中に逆説的に存在していた。大岡にとって礼節とか節度とか忠誠というモラルはどこから来たのであろうか。門司港を出るときから抱いていた〈死の予感〉、兵隊の矮小な体躯に感じた〈祖国の敗北の一つ〉、戦争は〈完全に非人間的な状態〉（『襲撃』、角川文庫版『サンホセの聖母』〈一九五三・三〉一一九頁）であるという認識、そして多くの将兵の〈無意味な死〉――そうした体験を経過したがゆえに熟成したモラルではないか。

大岡は丸谷才一との対談『翻訳と文体』（『水　土地　空間』〈一九七九・九、河出書房新社〉収録。同書一八八頁。）で、無駄を省いた簡潔な文体はスタンダールの『パルムの僧院』の影響を受けたものだと認めている。しかしそれだけでなく、スタンダールに始まる一九世紀フランス文学に学んだ幅広い文学的な教養がモラルバックボーンとしてあったことはいうまでもない。

大岡は『ミンドロ島ふたたび』の中で〈私は自分の戦ったミンドロ島の戦闘についても、一兵士にはわからなかったこと、帰国してから回想を書いた時にも、知ることの出来なかった多くのことを知った。〉（九頁）と書いている。興味深いことに、ミンドロ島守備隊の一員だった大岡は、昭和一九年一〇月以来、太平洋戦争において最も大規模な日米の空陸軍の決戦がレイテ島で行なわれたその実態すら知らなかった。ただ『西矢隊始末記』では〈十二月十四日バタンガスへ出張シテイタ給与掛ノ軍曹ガ帰ッタ。連絡船ハB24ノ掃射ヲ受ケ、兵一名ガ負傷シタ。軍曹ハ大隊副官カラ、レイテ戦局ノ絶望ナルコト、米軍ノ次ノ上陸地点ハオソラクサンセホナルコト、シカシ上陸シテモ大隊デハ救援部隊ヲ送レナイカラ、善処シテ貰イタイト申渡サレテアッタ。〉とあり、ある意味では正確なこの情報は隊員に共有されていたはずだ。レイテ戦の一部を知ったのはタクロバン俘虜収容所に送られ、そこに収容されていた俘虜たちからであった。おそらく大岡たちにとって、フィリピンの地勢と戦局の展開など知識として皆無に近かったのではないか。のち『レイテ戦記』に情熱を傾ける根拠はそこにあったのである。

大隊本部から見放され、援軍も不可能な状況となり、孤立した西矢中隊がルタイ高地に集結して最後の戦いに臨んだときの人員態勢を『西矢隊始末記』は次のように記している（これは『改訂

西矢隊始末記』でも変わらない）。

コノ地ニ集結シタ人員内訳ハホボ次ノ通リデアル。中隊本部及井上小隊合計六十一名。田中小隊四十五名。配属師団通信隊十二名。サンホセ気象隊六名。ブララカオニ漂着セル船舶工兵蠣崎中尉以下二十三名。非戦闘員サンホセ四名。ブララカオ十二名計十六名。総計百六十三名。

そして最後にはこう書かれている。

東京ヲ出発シタ西矢隊全員百八十名中、将校一、下士官四、兵十六、計二十一ガレイテ島俘虜収容所へ来タ。

他の部隊への編入その他でルソン島に止まった一二名のうち帰還した者が四名いたとすると、生き残った兵は二五名であった。大岡は「兵十六」の一人ということであり、生還率は七・二％であった。玉砕はなかったが、いかに過酷な戦争であったかを物語る。アメリカ軍上陸前までは暢気な小部隊に過ぎなかった大岡たちにとって、一転して日米における陸海空による大戦局の荒波に呑みこまれ翻弄されることになったのである。

〈俘虜記〉ものを含めて大岡が小説の中で執拗に体験にこだわるのは、戦争において死の優劣や死者の多寡によって考えるべきではないという理由に基く。ミンドロ島の戦闘は自分たちにしか分からない。そうした自負がシニカルな視点を含みつつも客観的な立場から回顧されているのが『西矢隊始末記』の特質である。たとえ現地の参謀から〈装備訓練劣等ノ兵隊〉とみなされ、一段格落ちの中隊に配属され、フィリピン戦線の僻地ミンドロ島の警備を命ぜられたことが特殊であったとしても、である。兵器は三八銃に弾薬一人約一八〇発。重機一台、不時着した飛行機から旋回機銃をはずして装備した。またゲリラ討伐のために小型の発動機船が配属されていた。一一月になって各自一個の手榴弾が支給された。兵力も装備もゲリラ相手が相応しい部隊だった。

大岡は隊の中では最も知性的な兵士であった。東京で教育召集を受け、二ヶ月間の特訓を受けた速成の暗号手であった大岡は、陸軍歩兵二等兵（のち一等兵に昇級）という軍隊最下位の階級にありながら、戦争の情報には敏感だった。レイテ島バタンガスの大隊本部との通信と偵察機の飛来によってアメリカ軍のフィリピン進攻作戦が刻々と迫りつつあることを知っていた。戦局には暗雲がたれこめ、各戦線から悲劇的様相の報がもれ聞こえてくれば、戦争の終結に密かな望みを託しつつも、玉砕の覚悟を予感していなかったわけではないだろう。

十二月十五日午前六時半、我々ハ班内デ朝食ヲシタタメツツアッタ。突然海岸方面ニ砲声ガ起リ、空ガ黒煙デ斑ラニナッタ。砲弾ノ空中ヲ飛ブ音ガ交リ、窓外ノ玉蜀黍畑ニ土煙ガ上ッタ。／我々ガ森ニ入ロウトシタ時、友軍機二機ガ高射砲弾ニ追ワレテ、東北ニ飛ビ去ルノヲ見タ。／艦砲射撃ハヤガテ止ンダ。

『西矢隊始末記』にはさらに〈レイテ戦局ノ悪化〉から〈サンホセノ状況モ悪化シタ〉とさりげなく書かれているが、一九四四

年末の段階で戦局が好転することは一切なかった。大岡は、一二月一五日、アメリカ軍が艦船六〇隻（のち一五〇隻に訂正。この数字はミンドロ島全土に集結し総攻撃をかけたすべてを指すものだろう）でもって上陸したときの心境を詳しく語っていない。ミンドロ島とルソン島の間の海域が分断され、暗号を処分して山中に逃れ行くときの心境は複雑であったと思われるが、意外に淡白な記述になっているのは戦史を意識したからであろうか。いずれにせよ、サンホセ警備隊は西矢政雄中隊長以下六〇余名の死者を出している。

その後、大岡は事実が判明した段階で旧稿を若干補訂し『改訂西矢隊始末記』として『ミンドロ島ふたたび』の巻末に再録した。読者はこの記録に注意の目を向けなくてはならない。いくつか興味深い記述を摘録してみよう。

> 我々ノ当面ノ敵ハゲリラデアル。中隊長ハ前任部隊ヨリ島内ノゲリラニツキ、ソノ所在地、人数、将校ノ姓名人相ニ到ルマデ、詳細ナル情報ヲ引継イデイタ。

山梨県出身の西矢中隊長はゲリラを徹底的に殲滅するという手段を講じなかったらしい。死者が出れば、復讐心に燃えた兵士が追跡の手を伸ばしたけれど一度も戦果を挙げることはなかった。彼は幹部候補生上りの応召将校でノモンハンの戦闘を知っていたが、兵の多くは中年の補充兵で実戦経験に乏しかった。散発的にゲリラとの戦闘はあったが、ゲリラ対策を積極的に行なって戦力が消耗することを断念していたらしい。追跡して銃撃してもほとんど当たらないという体たらくであった。捕捉したゲリラを取り逃がしても「俘虜一逃走ヲ企テタルニヨリ射殺セリ」と報告してごまかした。

一・三　兵士のさまざまな顔

フィリピンのゲリラについては『サンホセの聖母』で、比島軍の後身の親米抗日ゲリラ、スペイン統治時代以来の愛国者、いわゆる山賊の三種類に分けて説明されている。前二者はれっきとした軍隊組織をもっていた。彼らはスパイと連絡をとり土地勘を利用して神鬼出没し中隊を攪乱した。しかし西矢隊も手を拱いていたばかりではなかった。九月下旬には山中へ討伐に出かけている。一一月中旬、大岡と仲のよかった小林衛生一等兵はゲリラの列車襲撃事件で撃たれて死亡した。そのことは『襲撃』に描かれている。大岡は冷酷にも親しかった死者に対して同情もせず感傷的な言葉を書きつけていない。自ら〈何者でもない〉と位置づけ、一兵士としてその死を無意味とした限り、他者への同情など書き記すべくもなかったからである。

大岡は一九四五年一月二日にも、アメリカ軍の動きに連動して活発化したゲリラの討伐隊に参加している。そして悲運にも戦死した四、五人の海軍兵士の痛ましい屍体に目をそらしながらも敢えて目撃する。見ることと観察することが大岡のエゴイズムとして捉えられている。やがて彼らが野犬に喰われ鳥に啄ばまれることを幻視する。

> バタンガスデ我々ハ戦争初期日本軍ニヨツテ加エラレタ砲撃

ノ跡ヲ見、住民ノ明ラカニ悪意ニミチタ眼ヲ見タ。

短い記述だが、大岡は中隊長から現地の言語であるタガログ語の学習を命じられ、随時住民の中へ入って会話する特権が与えられた。海軍気象班の仲間と付き合いのあった大岡は彼らに連れられてフィリピン人の家庭の中へ入っていった。彼らは接触を拒否しなかったが明らかに距離を置こうとしていた。兵士の中には現地の美人女性に興味を抱くものもいた。短篇集『サンホセの聖母』の「ルイザとイザベラ」は〈戦場記〉（山本健吉の命名）としてはやや色気が漂う異色の章である。

占領した土地の住民の支持を失うことがマイナスであることは、西矢隊長はもちろんのこと一兵卒にいたるまで知っていた。それでなくても、大岡らは召集されたロートルともいえる予備兵であった。『サンホセの聖母』の中では一度も使われていないが、『ミンドロ島ふたたび』では〈拷問・強姦〉という言葉が使われているが、そうした行為に及ぶことなどする元気のない守備兵士であったと自嘲的に書いている。実際大岡の部隊にそのようなことがあったという形跡はない。ミンドロ島サンホセには一〇〇名に満たない守備兵と若干の邦人がいただけであり、中国大陸や東南アジアにおける宣撫班の役割を担う組織などなかった。日本兵はフィリピン人から敵意を抱かれていることを知っていたが、民家を訪ずれ一方的に友好の態度を示した。彼・彼女らは警戒しつつ菓子を出し湯茶のサーヴィスをした。会話をしたのは、町長、ドクトルと呼ばれていた医者、そして二人の美人姉妹だけであった。彼らの容貌はかろうじて描かれているが、ほかの住民たちの顔はおぼろげである。大岡が積極的な協力関係を描いていないところを見ると、相手はさほど好意的ではなかったのだろう。組織化されたゲリラの散発的な襲撃はそれを物語るし、案内のために捕捉した原住民の多くは日本人への協力を怖れて機を見て逃亡を企てた。現地人の女性にはゲリラのリーダーの妻もいたらしい。住民の多くは遠巻きにプレゼンスを実施している部隊の成り行きを眺めていた。住民にとって戦争は少しも利益にならないものであり、早く終結してくれることを願うしかなかった。明らかに日本兵に対して好意的ではなかった。

それでは西矢隊の配備がまったく徒労に終わったかというとそうではない。内心敗北を意識し自嘲的になっていたとしても、任務は確実に遂行されていた。彼らには月額二一ペソの俸給が支払われていた。給与掛の軍曹は大隊本部へ俸給を取りに行くし、大岡は毎日大隊への通信を怠らなかった。収集した情報は報告する義務があったからである。

二、〈廃銃〉と〈暗号〉

二・一　銃の行方

既述したように、大岡昇平は暗号手であった。東京で二ヶ月間特訓を受け、フィリピンのミンドロ島に派遣されて暗号通信技術に携わった一兵士であった。ミンドロ島の現状をバタンガスにあった大隊本部へ連絡し、本部の指令を受けて西矢中隊長に伝えるという簡単なものであり、アメリカ軍の暗号を傍受して解読するというような高度なものではなかった。

戦前から作家として認められていた梅崎春生は鹿児島の坊津で暗号手であったし、阿川弘之もまた同じ暗号の仕事に従事した海軍士官であった。戦後文壇に三人の暗号通信に関与した元兵士がいたということは珍しいのではないか。しかし梅崎や阿川にくらべると、大岡は後年にいたるまで〈暗号〉や〈推理〉に関心を持続させた作家であった。

「部隊換字法」は野戦で大隊間の連絡に用ひ、四折の厚紙の裏表におよそ五百の暗号が印刷してある。暗号は三数字結合で、それぞれ「敵」「聯隊」等の単語、或ひは「異常ナシ」「志気旺盛ナリ」の如き慣用句を意味してゐる。これが「生暗号」である。

実際に発信するのはこれに「乱数」といふ、気儘に結合された三数字を加へたものである。その算法は「非算術加法」といひ、加へてあがつた桁は上位の数字に影響しない。例へば356に467を加へた結果は、823ではなく713である。解読に際しては同じ要領で「非算術減法」を行へばよい。(『暗号手』)

初歩的な暗号体系を扱うわけだが、中隊内部では一番知的な作業であった。大岡はその仕事を誇りにしていた。ある意味では、暗号手は大隊本部と直結しているために特権的な地位にあり、大岡はそのことに自覚的でもあった。『暗号手』はそうした個人的な思い出がこめられたユニークな短篇である。

軍隊では〝一にヨーチン、二にラッパ〟と衛生兵とラッパ手の順に閑職を嘲笑気味に言った。ラッパ手は起床と消灯のラッパを吹くことが最大の任務であった。しかし西矢隊では〝一に暗号、二にラッパ〟と言われた。閑職への嫉妬のあまりときには難題が生じることがある。空襲警報の知らせがあったとき、大岡が事務所に置いてある「部隊換字法」を持ち出して退避する義務を怠ったことを下士官から叱責された。攻撃を受けて敗走したりするときは、乱数表を含め一切の暗号関係の機材は焼却して土に埋めるなどして処分することが義務づけられていたからだ。中隊長の温情で「部隊換字法」を班内に持ち帰って管理することが許されたが、兵士であるかぎり銃の携行もまた義務づけられていた。

しかも私の暗号書と共に持つて出ねばならぬ銃は廃銃であつた。討伐に行つた時、他の兵士が弾倉底板を海中に落したのであるが、兵器掛が手続を面倒がつて、大隊本部に申告を怠つてゐる代物である。暗号手は討伐にも行かず衛兵にもつかないといふ理由で、私の銃はそれと替へられた。情況が悪くなつてみると、これは私としてちよつと気になることであつた。(『暗号手』)

軍紀の乱れというよりいかにものんびりした警備隊を象徴する話だが、このことは大岡の銃に対する感覚とアメリカ兵を撃たないことによって結果的に俘虜となる重要な岐路とは無関係でないように思われる。つまりこうである。大岡は出征時に菊の紋章が刻印された銃を与えられ七ヶ月間それになじんできたが、ゲリラ討伐に参加した兵士が誤って海中に〈弾倉底板〉を落してしまったために〈廃銃〉の処置をすべきであったが、兵器掛の軍曹が面

倒がってその手続きを怠り〝一に暗号〟の大岡の銃と交換させられた。したがっていくども試射して使い慣れたものではなく、暗号手という閑職に相応しいポンコツ銃が回ってきたというわけである。〈情況が悪くなつてみると、これは私としてちよつと気になることであつた。〉という不安は、アメリカ軍の艦砲射撃がはじまり敗残兵になって敗走するときに決定的なものとなる。役に立たない銃など携行する意味がないからである。『敗走紀行』にはそのことが描かれている。大岡は分隊長に「この銃、持てなくなつたら棄てゝもいゝでありますか」と訊き了解をとりつける。その前後の行動と心理を『敗走紀行』（『来宮心中』〈一九五一・五、新潮社〉所収）から引いてみよう。

私の状態はさらにひどい。弾丸は百五十発持つてゐるが、銃は廃銃である。ゲリラが現はれても私にはたゞ伏せて弾を避けるほか手段はない。

……私は銃を棄てた。行軍の列の斑らになつた時を見すまして、横手の林中に入り、木の根方の草にほどよくわが廃銃を横たへた。（『来宮心中』一〇六頁、以下の引用は同書から）

敵前武器放棄は死刑であることは、いくら補充兵でも知つてゐる。知りながら、私が敢へて銃を棄てゝしまつたのは、その行為の瞬間、結果の予想が頭に浮ばなかつたからである。（一〇七～一〇八頁）

要するに廃銃を病人が持つて歩く、といふ事実の中にある不合理が、私に罪を意識させず、引いては刑罰を想像させなかつたのであらうと思はれる。（一〇八頁、傍点引用者）

後、山中で最初に死んだ病兵の銃を私は引き継いだ。廃銃は兵器掛の下士官が土に埋めた。

私は中隊長の言葉と態度から、私の罪が重大な結果にならないことを直感した。しかし恥は残つた。（一〇九頁）

大岡は高等学校の軍事教練で実射をしたことがあるが、それ以降銃を撃ったことがなかった（『戦争』）。近聯（近衛第一聯隊）内での教育召集でも実射訓練は行なわれなかった。

ところで、信じがたいことだが、大岡に持たされた銃はなぜいくどもの数奇な変遷をみたのだろうか。もう一度整理してみよう。

①出征のときに授かった三八銃は、学生の軍事教練のために民間に払い下げられたもので軍が最徴集したものであった。幸か不幸か〈御紋章にはバッテンを刻んで消してあった〉。（『敗走紀行』一〇五頁）

②その銃は、〈弾倉底板〉（遊底）がない廃銃と交換させられた。暗号手には鉄砲は要らないという理由からであった。

③〈病兵が廃銃を持つて歩くのが無意味であるといふ私一個の判断と、それが戦争に馴れた下士官によつて、予め黙認されたため〉（『敗走紀行』一〇四頁）から、敗走の途中、密かに木陰に棄てた。その判断は敵前武器放棄という軍隊の規則に抵触するもので、中隊長に見つかり再び持つことになった。

④山中で病死した戦友の銃を貰い、廃銃は地面に埋めた。
⑤その銃は銃身に掃除をする由布のつまった戦友の銃とみたび交換されられた（『戦争』一四二頁）。アメリカ兵と遭遇したときに所持していたものはこの銃であった。
ごぼうと俗称された帯剣も山中の露営生活で調理用の包丁として使われて刃こぼれがしていた。
こうしてみると、大岡が山中で敵兵（フィリピンゲリラやアメリカ兵）と向き合う武器としては不充分であったことが分かる。
銃や剣よりもペンに生きることを象徴するような、こうした偶然ともいえる事実の積み重なりはいったい何を意味するのだろうか。それは運命とも神の摂理（配慮）ともいえないだろうか。神もまた憎悪と憎しみを旗印にかかげて復讐のために戦ったことは歴史が教えるところだが、だからといって一般化することなどできない。大岡が召喚した神はヒューマニズムという神ということだろうか。もし偶然という事実の連鎖だとしても、それを書く大岡には銃や剣よりもペンのほうが強いということを暗示しようとする意図があったことは確かであろう。
〈廃銃〉の手続きをしなかった軍曹、銃を棄ててもいいと言った分隊長、マラリアに罹ってふらふらしながらポンコツ銃をかついで行軍する〈不合理〉から銃を棄ててしまった大岡一等兵、それを悲しい眼で黙認し「普段の心掛はかういふ非常の時に現はれる。今後気をつけろ」というだけで事件を処理した西矢中隊長――ここには銃をめぐる話だけではないさまざまな人間模様を読み取ることができる。それは組織の緩みとか軍紀の崩壊とかいうべきものではないだろう。〈我々はいづれ消滅する運命にある六十名の部隊であつた。〉という悲劇的な現実を直視しているがゆえの人間のドラマであったというべきだろう。とくに大岡一等兵の場合には銃の因縁が最後までついて回ったのである。あたかも由布が撃つことを禁じたかのように戦友の銃が命を救うことになるのである。

二・二　暗号解読

ジェイムズ・グリック『インフォメーション　情報技術の文明史』（〈楡井浩一訳、二〇一三・一、新潮社〉）の中に次のような興味深い指摘がある。

すべての秘匿の体系に共通するのが、鍵の使用だった。鍵は符号語、または符号句、または一冊まるごとの本、またはさらに複雑なものであったりするが、いずれの場合も、送信者と受信者双方が知る字素の供給源であり、その知識はメッセージ自体とは別に共有される。ドイツ軍のエニグマ暗号体系では、鍵は暗号機に内蔵され、毎日変更された。英国政府暗号学校は、暗号文を入手するとそのつど、新たに変容した言語のパターンを専門化が見抜き、鍵を再発見しなくてはならなかった。（同書、二七〇～二七一頁）

大岡は探偵小説の愛好者であり、暗号手としては優れていた。〈送信者と受信者双方が知る字素の供給源〉は乱数表と呼ばれる。暗号手はあらかじめ符号語や符号句のパターンを覚えていて通信文に適用して短時間に読み取るわけだ。『暗号手』には〈「陸

四」等高級暗号〉についてかなり詳細に説明されているから、一通り知識を身につけていたと思われる。

グリックが述べているように、高度な技術とは、敵の暗号文を入手すると、新たに変容した言語のパターンを見抜いてその鍵を再発見し解読する作業である。相手の情報源解読の手がかりを与えるか与えないかの攻防にあった。ひとたび手がかりを得てしまえば、敵の作戦の裏をかいて攪乱することが可能となる。言語のパターンが変わっていなければ鍵はそのままでいくらでも敵の交信記録の内容に適応してメッセージを知ることが可能となる。しかし高度な暗号システムは、鍵を一回ごとに変えることであるといわれている。

日本陸軍がそこまでの暗号技術を駆使して英米に対抗しえたのであろうか。太平洋戦争における英米との開戦から敗戦まで、外交・軍事両面での重要な情報はいち早くアメリカ軍によって解読されていたために諜報合戦においても敗北だったといわれている。大局的な観点からの国家間の諜報活動はさておき、大岡は〈「ブラック・チェンバー」の愛読者であつた私は、無論「部隊換字表」をとつくの昔に敵の手に渡つてゐると思つてゐる。〉と自嘲的に書いているように、一小警備隊と大隊本部とのやりとりなどの単純な通信技術はアメリカ軍に傍受されメッセージは筒抜けであったであろう。後年、大岡は『ミンドロ島ふたたび』の裏表紙に「ミンドロ島米軍諜報図・ＩＳＲＭ」を掲げた。ＩＳＲＭの高度な無線通信ネットワークの中心はミンドロ島のほぼ中央の山巓に位置し、島内の七方向と緊密に結ばれていた。大岡の任務は毎日一回バタンガスに置かれていた大隊本部との通信にあったが、だとするとバタンガス←→サンホセの通信連絡線上にＩＳＲＭはあったわけである。大岡は戦略的な寄与などほとんどなかったが、縦横に張りめぐらされた米軍諜報図を見て、一暗号手として決定的なその差異を痛感し、惨めな思いに駆られたことであろう。制空権を得た飛行機による偵察と通信傍受とゲリラによる情報などを総合すれば、サンホセを拠点とする西矢中隊や島の半分を警備する塩野隊の動向など手に取るようにわかり、ミンドロ島の攻略など赤子の手をひねるようなものであったろうし、実際西矢中隊の壊滅と敗走の〈戦史〉はそのことを如実に物語っているからである。

アメリカ軍の艦砲射撃で山中に逃れ、鋸山と称していた山の麓で、大岡は気象観測班の二号無線機を使って大隊本部へ次のように打電する。それが暗号手としての大岡の最後の仕事であり、しかも中隊の動向を知らせる最後の電報であった。

「昨十五日〇六〇〇敵は艦船六十隻をもってサンホセ北方六キロ、サンドラヤンに上陸せり。本隊は三日の予定をもってブララカオに向かい、田中隊と連絡の上新たに企図せんとす。現在地サンホセ北方十キロ。全員士気極めて旺盛、誓って撃滅を期す。」

たぶん発信地点を明らかにしたこの電文は傍受されていたことであろう。確たる情報源から正確な情報を引き出し、大隊本部に伝達する任務にあった大岡らは、思わぬ手柄を挙げることがあった。諜報活動によって互いに敵に知られたくない情報を盗み出し、

裏をかいて戦局を有利に展開するためには必要なことであったが、よほどのことがない限り自己満足に終わる。

あるとき、大岡は帆船の中から押収した書類の解明を仰せつかり、船中で夜を徹して翻訳したことがあった。書類の束はゲリラの指導と情報収集の任務を帯びたアメリカ軍の特別分遣隊の少佐のものらしく、中にはミンドロ島の諜報組織と思われる図解が一葉含まれていた。若い頃から探偵小説を愛し推理を好んだ大岡はこのささやかな発見に密かに興奮したことだろう。

書類を翻訳して大隊本部に送った大岡らはその功績によって第一四方面軍司令官山下奉文将軍から「謝状」を貰った。西矢隊唯一の成果であるとともに、暗号手としての大岡の誇りであったに違いないが、太平洋戦争の終末期、戦局を左右するどれほどの価値があったかははなはだ疑問である。

三、〈柵〉の中から〈柵〉の外へ

三・一　収容所生活の実態

一九四五年六月の末、大岡たちはレイテ島タクロバン北方四キロメートルのパロの新収容所に移転して新たな俘虜生活を送ることになった。その近郊は第一六師団の一個大隊が全滅した激戦地であった。

新収容所は「レイテ島第一収容所」と呼称され、四隅に監視塔をもち、四方有刺鉄線の柵に囲まれていた。そこに七個中隊、約二〇〇〇名の俘虜が収容されていた（『新しき俘虜と古き俘虜』、講談社文庫版『俘虜記』〈一九七一・七〉収録、三三三頁。以下、本節の引用はすべて同書に拠る）。この収容所は施設面において次第に改善され、フィリピンにおける収容所の模範とされ上級将校の視察の対象となった。組織はアメリカの軍隊に倣い、最初は大隊本部を頂点に五個中隊（各約二三三名）に分れ、一中隊には四小隊があった（『労働』二四〇頁、二四一頁の図参照）。別に台湾人が五〇〇人ほどいた。大岡は第二中隊に所属した。

敗戦直後の〈九月中旬から入って来た新しい俘虜のために、一個中隊の人員は五個小隊計三百名に増加し、中隊の数も十一個まで増えた〉。新しい俘虜とは日本の降伏後に武装解除されてフィリピン各地の島から送られてきた俘虜を意味する。

将校や下士官の一部は階級章を引きちぎり身分を隠そうとした。俘虜の多くは〝生キテ虜囚ノ辱メヲ受クルナカレ〟という戦陣訓とフィリピンでの旧悪が露顕するのを怖れて偽名を使った。生涯に偽名を三〇〇以上も使ったスタンダールの耽読者であった一等兵の大岡は、怖れるものなどなかったために本名を名乗った。そして偽名者を嘲笑した。また将校や下士官で階級を引き下げて申告した者もいれば、逆に自分の存在感を誇示するために階級を引き上げる者もいた。収容所の日本所長に上り詰めた今本（通称イマモロ）はそうした人物であった。

大岡は〈戦争〉によって一介のサラリーマンから病んだ虜囚に転落した。多くの俘虜もさほどの差はなかったであろう。しかし大岡には知性と語学力があった。収容所は一筋縄ではいかない混沌とした日本人の縮図であった。大岡は通訳としてその調整役となり、強硬な対抗措置などとろうとはしなかった。

俘虜は誰も月に〈衣食住プラス三弗の俸給〉（『労働』二四二

頁）を得ていた。仕事上、中隊付のサージァントであるドイツ系のアメリカ人ウェンドルフ（通称・ウェンディー）と知り合うことによって、『労働』（二七九頁以降）の章には水を得た魚のように大岡の鋭い知性が熱帯生活の中で輝き始める。

ここでの生活が〈俘虜記物〉のほぼ全容を占めている。憑き物が落ちたように健康を回復した大岡の新しい生活の開始である。俘虜たちの二重三重の被害者意識も何をいっても許されるという特権性を振りかざすことも時間とともに次第に緩和されていった。要するに俘虜生活に慣れ落ち着いてきたということだ。

大岡は〈柵〉で囲われた自分たちの〈奴隷〉状態を客観視し、古い俘虜たちと新しい俘虜たちの〈堕落〉と〈怠惰〉と〈過去の悪行〉を知ったが、そうした狡猾な俘虜を嫌悪せずにやりすごした。ときには共感すら懐くことさえあった。新旧両俘虜たちが激しく対立したのでその調和を図ろうとした。ときにはアメリカ軍と俘虜幹部との板ばさみとなった。

『生きてゐる俘虜』（講談社文庫版『俘虜記』、以下同じ）の最後には、何もすることのない収容所生活で肉体をもてあます〈裸形の男性の肉体の集団〉（一七八頁）の異様さについての鋭くかつ複雑な印象が書きとめられている。そこから大岡は俘虜たちが殺人機械であり肉体機械ではないかという幻想を懐く。〈それは機械力の不足を補うために日本陸軍の指導者が発明した方針に基づき、耐久力を主として鍛錬された肉体であって、有用であるという意味で少しも畸形ではない〉（一七八～一七九頁）。組織には有用性・効率性が求められ、規格にはめられた初年兵教育があり、その象徴としてビンタが横行した。厳格な上下関係と奇妙な軍隊用語の徹底が強要された。耐久力のある有用な〈鍛錬された肉体〉はいともたやすくシンガポールを陥落させ、コレヒドール要塞を攻略しその厚い壁を打ち砕いた。軍部と支配層の一部には、アジアから英米仏蘭を駆逐し、日本を盟主とする恒久平和の大義と大東亜共栄圏の王道楽土のイメージが鮮明になってきたことだろう。『比島戦記』（一九四三・三、文藝春秋社）に収められている多くの写真には、兵士の〈鍛錬された肉体〉が敵に打ち勝ち新しい秩序を切り開いていく様子が撮影され賛美されている。そういう意味では畸形などではない優秀な肉体機械であった。耐久性のある肉体はジャングルの中で飢えを凌ぎアメリカ軍と対峙しそれを凌駕し駆逐した。アメリカ軍上層部は日本の飛行搭乗員と工兵の優秀さを手放しで賛美するにやぶさかではなかった。

しかし比喩的にいえば、玉砕も機械であるがゆえに美化されたわけであろう。マラリアに冒され心臓に疾患をかかえた初年補充兵の大岡の肉体はまったく別なものであった。

ある面、大岡は何も考えずに兵士になりきれる人間をうらやんだ。俘虜になる前、戦いのない日常生活で生起する諸問題について、冷徹な知性とサラリーマン的な習性が邪魔をすることに悩み、自己嫌悪と自己否定に苛まれることもあった。

そうした一兵士の悩みと有用な〈鍛錬された肉体〉を持つことは決定的に違う。大岡が異様と思ったのは中国を転戦してきたもっとも優秀な現役兵の肉体であった。しかし武器を放棄し〈柵〉の中で二七〇〇カロリーのアメリカ食で太り始めている俘虜たちは全く無用な存在だ。冷徹な知性と文学的想像力に裏打ちされた大岡の眼は〈裸形の男性の肉体の集団〉の背後にあるものを見逃

さなかった。

収容所の中央を貫く道路の反対側には、日本の軍隊として戦った台湾人地区があった。三〇名（のち五〇名に増えた）ほどの将校は隅の一角のところに収容されていて往来できなかった。医務室・理髪室・塵芥焼却所が設備され、中隊毎に炊事場・シャワー・便所があった。かなり広い外業者集会場があり、そこの出入り口から、アメリカ軍のために一週六日、一日八時間労働で八セントが支給される外部労働に出かけた。収容生活で一〇〇日の労働をすれば、八ドルの対価が得られたわけである。中隊事務員として労務管理の仕事を手伝った大岡は外業をさぼる俘虜たちの怠惰を容認した。ある点ではそれに協力もした。

ニッパ椰子で葺かれた切妻形のニッパ・ハウスで寝起きし、仕事がないときは小屋のベッドでごろごろしていた。移転したときこの収容所は未完成で、中隊の小屋と付属設備の大半は俘虜たちの労働によって造られた。出来不出来を別とすれば、各中隊は争うようにして技を競った。軍国主義の〈体系（システム）〉によってがんじがらめにされていた彼らの思考と感性が緩やかに動き始めた事件として、大岡はそれを収容所初めての〈デモクラシー〉として認めようとした。硬直しこわばりを呈していた個人の道徳と倫理が解放された瞬間を見たのである。

こうして自分達のものを自分で建てるという仕事の性質から、我々旧日本軍人の間に初めてデモクラシーが生れた。つまり各小隊共、多忙の口実で中隊本部、炊事場の建設に使役を出すことを拒み、各自その構成員が働くほかはなかった。（中略）一二中隊は棟上げがしてあり、内部の盛土と周囲の腰張りを作ればよかったが、あとの三個中隊は全然手をつけてなかったから、これは特権に馴れた幹部達にとって打撃であった。（『労働』二四三頁）

軍国主義のシステムを解体し、俘虜社会の中に発生した特権階級を相対化し、堕落した俘虜生活から自発的な行動を起こすこと、そこに大岡は〈デモクラシー〉の萌芽を見ようとした。

三・二　帰還前後の俘虜たちの心理

大岡たちは一九四五年一〇月二八日の夜、一一月一五日に帰還できるという通達を受けた。帰還の順番は俘虜番号によって区切られ、収容所における中隊・小隊の構成はばらばらになった。それは一〇ヵ月間慣れ親しんできた仲間意識の終焉であった。淋しくはあったが、帰る喜びには代えられなかった。大岡には兵庫県明石に妻と二人の子どもが待っていた。

月三ドルの俸給と外業で得た一日八セントを積み立てた金は、総額で二〇〇円まで日本への持込みが可能であった。それ以上の所持金は日本銀行宛の手形に換えられるか支払い証書が交付された。帰国してただちに食うに困ることはなかった。戦争の実態を冷静にみつめ、品行方正な俘虜はスムーズに一市民として敗戦後の社会に同化することが可能であった。

帰還する直前、いくつかの困難が生じた。ひとつは何パーセントかの俘虜がフィリピン人の告発の対象として留め置かれたこと、もうひとつは俘虜の一部が〈劣等感と被害妄想〉からある幻

想に囚われたことであった。それは、自分たちの決定的な〈敗戦〉を容認し、早い〈終戦〉の到来を待ち望んでいたにもかかわらず襲ってきたものであった。俘虜の心には、入営以来叩き込まれた〝生キテ虜囚ノ辱メヲ受クルナカレ〟という呪縛の声が囁き、内地に帰還しても人々から冷眼視され社会に受け入れられないだろうという推測からきたものであった。大岡にはこうした〈劣等感と被害妄想〉はまったくなかった。彼の知性はすんなりと戦後社会に同化できるように鍛え上げられていた。出港前、日本人の半分は良い、しかし半分は悪いと言ったフィリピン人に対して、大岡はフィリピン人はすべて良い、とお世辞をこめて答えた。

船舶に必要な水の用意など何かとてこずり、復員船信濃丸は一一月三〇日になってようやくフィリピンの地を離れた。大岡は温厚そうな船長が情報に飢えていて俘虜が持っている『ライフ』や『タイム』を要求したことを記している。船の中では収容所で聞き飽きた敗軍の経験談に花が咲いた。大岡はつとめてそこに顔を突っ込んで聞こうとした。

……もうすぐ彼等と別れようとしている時、私は彼等の話を惜しんだ。あちこちお蚕棚を巡って、各師団の敗戦談を聞いて歩いた。現在私が持っているレイテ島の戦闘に関する知識は、大抵この帰りの船中で得られたものである。（『帰還』）

大岡自身、ミンドロ島の警備隊の体験を語らなかった。それは一層内面化され発酵する時間を経て『俘虜記』『続俘虜記』『サンホセの聖母』などに収録された〈戦記物〉としてわれわれに手渡されることになった。戦場にはいなかった〈レイテ島の戦闘〉については、その後の調査や文献資料の読み込みによって厖大な記録文学『レイテ戦記』の誕生となった。

なお、日置英剛編『年表太平洋戦争全史』（二〇〇五・一〇、国書刊行会）には、フィリピン戦線におけるルソン島の戦いについてはかなり詳しく拾われているものの、同じ激戦地であったレイテ島での戦争については軽く扱われている。ましてやミンドロ島の戦いについてはまったく無視されている。兵士の〈死〉そのものには差異はないというのが大岡の哲学だった。特攻隊の詳しい記録に比べると不当な扱いである。大岡が自分の体験を執拗に書きとめ、所属した小部隊の記録を再現し、『レイテ戦記』を完成させたのもしごく当然のことといえるだろう。

多くの俘虜たちは施政者に対して拱手傍観しているばかりだった。大岡だけが〈手〉を動かすことによって〈柵〉の中の共同体に微かな波動を与えた。

戦場ならびに収容所生活の過去を回想し、記憶を再生させることは、ときに優れた幻想を生み出す。しかも大岡の倫理的内省と鋭い心理分析がテクストを豊饒なものにした。そうした一面は「大岡昇平の〈戦争〉Ⅱ――〈夢想家〉の実像あるいは錯視の心理学」（『藝文攷』二〇一五・二）で分析した。それは大岡が培った人間性や辛辣な皮肉や諷刺と矛盾するものではなかった。むしろ戦場で身につけたエゴイズムがそれを一層可能としたのである。（了）

（いしざき・ひとし　元本学教授）